

# 平和記念だより

◆編集・発行：高松市 人権啓発課 高松市平和記念館  
◆連絡先：高松市松島町一丁目15番1号  
たかまつミライエ5階  
TEL:087-833-2211 FAX:087-833-2244



## 高松市戦争遺品展

令和元年7月23日(火)から29日(月)まで、瓦町FLAG2階コンコース(ことでん瓦町駅改札前)において、「第29回高松市戦争遺品展」を開催しました。高松空襲の被害状況が分かる市街地図、焦土と化した写真、戦時下の暮らしを写したパネルや多数の遺品のほか、集束焼夷弾の実物大レプリカなど73点を展示しました。

瓦町FLAG2階コンコースでの開催も今年で2回目となりますが、来場者からは「この場所になって、見に来やすくなった」「通りがかりで見ることができるのがとても良い」とのお声をいただき大変好評でした。

来場者の中には、実際に高松空襲を経験された方もおられ、「焼夷弾の雨の中を奇跡的に生き残り、その後7年間、人生を送ることができて感謝している」「当時は幼くて記憶も不鮮明だが、爆弾の落下する音や街中の建物が燃える様子が時々よみがえってくる」と話されていました。

また、「若い世代や子どもたちには、戦争はピンと来ないかもしれないが、目を伏せたいことや悲惨な過去を目にして、考えたり感じることをしなければいけない」と話される方もおられました。



今回、「最近の寄贈品」コーナーでは、海軍中尉の男性が激戦地であった硫黄島で戦死したことを告げる「戦死通知」や出征先から家族に宛てた軍事郵便などを展示しました。また、「高松空襲関係」の展示コーナーでは、高松空襲の後、市内中心部で見つかった薬きょうや溶けて変形したガラスの塊なども展示しました。

平和記念館では、高松空襲関係の資料や戦争遺品、当時の生活用品などを、多数、常設展示しています。皆様のご来館をお待ちしております。

## 高松市戦争遺品展 ご来場者アンケートより

当時のお話を聞かせていただいたり、アンケートにご協力いただきました皆様、誠にありがとうございました。

母から父の戦死の状況を聞いたことがなかったため、厚生労働省に問い合わせたところ、ルソン島近海で米軍との交戦中に戦死したようだった。母が寄贈した父の遺品を見て涙があふれてきた。私は、この父母のお陰で80歳を超えて生きてきた。若い人には、どうか世界平和の実現のため、力を貸していただけるようお願いしたい。  
(80代：女性)



高松空襲を体験された方が、パネル等を見ながら当時の様子を語ってくれました。

当時八坂町に住んでいた。他の家族は先に避難していた。空襲が始まり父は町内会長だったため、消火に行ってしまった。西へ、とにかく逃げた。数日後、父が焼けた家の前で待っていた。その時の光景は今でも忘れられない。

(80代：女性)

丸亀中生だった。三菱重工へ学徒動員で行くためにずっと村井楼を宿として泊まっていた。高松空襲の一週間前に宿の村井楼を出発した。その後、薬業にかかわることになった。この時期に高松に来ると高松空襲を思い出し、胸が痛む。

(80代：男性)

当時国民学校4年生。高松駅近くに家があった。姉は挺身隊。母は勤労奉仕をしていた。父は広島に兵隊に取られていた。その日、焼夷弾が家の裏あたりに落ちたと感じた。とっさに母は自分の手を引いて大的場あたりに必死に走り、岸壁から飛び降りた。恐ろしくて目の前の女木島をじっと見ていた。焼夷弾が落ちるさまは、ヒューという嫌な音と、キラキラ光るものだった。

(80代：男性)

## ▼今後の行事予定▼

2月

高松市戦争遺品等収藏品巡回展

期 間 令和2年2月20日(木)～27日(木)

場 所 高松国分寺ホール

内 容 市民の皆様から寄贈された戦争遺品を中心に展示





# 高松空襲写真展

令和元年6月28日（金）から7月8日（月）まで、平和記念館映像学習室において、「高松空襲写真展」を開催しました。

昭和20年（1945年）7月4日未明、高松は米軍による空襲を受け、旧市街地の約80%が焦土と化し、1,359人も尊い命が失われました。当館では、毎年この日を含む期間に高松



空襲の惨状を伝える「高松空襲写真展」を開催しています。

今回は、空襲直後の市街地を米軍が撮影した航空写真や空から無数の焼夷弾が降り注ぐ様子を描いた絵画など、約20点を展示しました。

また、6月に寄贈されたばかりの小豆島の女性（当時、明善高等女学校4年）が学徒動員で勤労奉仕中に体験した緊迫感にあられる高松空襲の手記なども展示しました。

来館者の中には「被害の様子を目にすることで、改めて平和の尊さを実感させられる」と話される方もおられました。



# 高松戦災・原爆写真展

令和元年8月8日（木）から8月14日（水）まで、市民交流プラザIKÛDE瓦町展示コーナーにおいて、高松市平和を願う市民団体協議会と共催で「高松戦災・原爆写真展」を開催しました。



原爆の投下で廃墟と化した広島や長崎の街並みを捉えたパネルなど約70点を展示しました。

中でも、被爆後の長崎で撮影された写真「焼き場に立つ少年」は、亡くなった弟を背負って、火葬の順番を待つ姿を捉えたもので、74年が経過した今もなお、戦争の悲劇を訴えかけており、多くの来場者が見

入っておられました。



また、「高松空襲や原爆の被害状況などを夏休みの自由研究のテーマにしたい」と多くの小中学生が、カメラを手に一生懸命取材をしていました。

「核兵器の廃絶」「世界の平和」は、人類共通の願いであり、私たちは、世界で唯一の核兵器による被爆を体験した国民です。平和記念館では、その悲惨さや恐ろしさを後世に伝えていく取組みを今後も



行ってまいります。

## 収蔵品紹介 63 《最近の寄贈品より》

### 軍帽（海軍予備学生）

寄贈者 高松市 藤澤 公美 様

寄贈者の伯父は、昭和18年（1943年）9月発行の海軍第二期兵科予備学生アルバムに名前が載っている。海軍予備学生は、旧制の大学・高等学校などの卒業生から志願により採用され、1年程の訓練期間を経て少尉に任官された。寄贈者の伯父は、横須賀海軍通信学校で教鞭などといった後、硫黄島に着任し、昭和20年（1945年）3月、激戦の中、戦死した。

写真の軍帽は、寄贈者の伯父が海軍第二期兵科予備学生のと  
とき、東京で下宿生活をしていたときのものである。



海軍を象徴する錨(カ)と桜が真正面に

## 戦時用語解説58 《タピオカと代用食》

昭和16年（1941年）、国内の食糧事情の悪化に対応するため、東京で米の配給制が始まり、その後、全国に広がっていった。そこで注目されたのが、米の代用食としてのタピオカだった。

昭和17年（1942年）、日本軍はシンガポールを占領し、ジャワ島を統治下に置いた。ジャワ島はタピオカの産地であることから、軍隊の食糧物質の調達などを担った旧日本陸軍糧秣本廠りょうまっほんしょうは、タピオカでんぷんの製造法を紹介している。

昭和19年（1944年）頃を機に、戦況は大きく悪化し、東南アジアなど南方戦線では補給線が途絶え、食料不足が加速した。昭和20年（1945年）のフィリピン、レイテ戦では、食料も物資も自ら調達する「自活自戦」の命令が下された。各部隊の自活自戦要領には「朝夕の主食はトウモロコシのみ、昼食はなく、タピオカ・バナナを必要であれば代用する」と記載されている。その後、「現地自活」をする余裕もなくなり、餓死する者が多発した。

参照：「第一師団の降伏」富田清之助著（中央公論「歴史と人物」昭和49年（1974年）9月号掲載）

### 編集メモ

戦争体験者の方々が高齢となり、語り継ぐ方々が少なくなっていく中で、今回の遺品展や写真展にも、多くの若い世代の方にご来場いただき、誠にありがとうございました。



平和記念館では、今後も、後世に戦争の悲惨さと平和の尊さを伝えていくため、各種の啓発事業などの実施に努めてまいります。何とぞ、よろしく願い申しあげます。



高松市平和記念館 開館時間：9時～17時 休館日：毎週火曜日 入館料：無料

▼ホームページアドレス（平和啓発の推進事業がご覧いただけます）

<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/shinotorikumi/jinken/keihatsu/heiwa/index.html>